

喫煙傾向が、脈圧および四肢末端の冷えに与える影響について

○安達和俊（中京短大）

（目的）喫煙傾向が、血圧（最大・最小）、脈圧および四肢末端の冷えに与える影響について考察する。

（方法）平成3（1991）年4月1日より平成10（1998）年3月31日までの7年間に、私のクリニックへ午後（PM2:30～4:30）受診し、1日、紙巻きたばこ20～200（平均30）本の喫煙習慣のある20～79歳の患者で、1)医師から、高血圧との診断を受け、降圧剤の投与を受けている者、2)受診前2回の食事で、合計8g以上の塩分を摂取している者、3)血圧測定前のBiofeedback Unit（独・Nemectron社製）による手掌の発汗状態のチェックからEmpfindlichkeit（感度）2以下で、Anregung（興奮）30以上の交感神経の緊張状態にある者を除く、174（男140・女34）名の最大・最小血圧を測定し、各々脈圧を算定し、その内、四肢末端の冷えを訴える者については、Thermographyにより、その体幹部との温度差および同末端部の温度を測定し、前者が8.2℃以上あり、後者が25.2℃以下の者をカウントした。

（結論）1)まず最大血圧は、139以下に、93（男96・女82）%以上が集中し、2)最小血圧は、90以上に、51.7（男54・女41）%以上、すなわち半数以上が片寄った。3)その結果、脈圧は、73.5（男77・女58.8）%以上が、39以下となり、4)四肢末端の冷えを訴え、実際に体幹部との差が、8.2℃以上であり、同部が25.2℃以下の者が、55（男51・女70）%以上、すなわち全体の半数以上を占めた。そこで、これらの結果から、たばこのニコチンが、末梢の血管を攣縮させ、それが四肢末端の冷えにつながり、そこへ血液を送り出すため圧力を高めなくてはならず、最小血圧が上昇し、脈圧が低下する傾向があるのではないかと推測した。